

組織行動研究

No. 12

編集後記にかえて

●本号は、二人の、若々しい研究者の仕事を収録することが出来た。ひとつは、浦さん(関西大学)の仕事。そして、もうひとつは、高木さん(慶應義塾大学)の仕事だ。それぞれの仕事の内容は、モノグラフそのものを読んでいただくとして、編集サイドからは、つぎのことを述べておきたい。

●それは、どちらの仕事も、今回のかたちが“最終完成品”ではあり得ない、ということだ。それぞれが自らに問いかけ究明しようとしている問題に照せば、今回のモノグラフは、文字どおり、ひとつの探索的(exploratory)な試みの結果報告と受けとめられるべきものである。ちなみに、この故にこそ、浦さんも高木さんも、さらなる探索と究明にむけて、読者からの忌憚のない“パフォーマンス・フィードバック”を強く望んでおられる。

●そして、実はこれは、編集にかかわったわたしどもの希望でもある。そういうフィードバック・ループが、わが国の研究者たちのあいだにもうすこし(いま以上に)活性化して在るべきだと思っているからだ。いまのような状況だと、いずれ、わたしたちの仕事は、自己満足感の充足か、あるいはせいぜい世俗的な座標軸のうえでの自己確認にしか接合点が見出し難くなってくるだろう。いずれの接合点も、本来、わたしたちの希求

しているものではないはずだ。

●ところで、本誌も12号を数えるところまでできた。言うまでもなく、本誌は、慶應義塾大学産業研究所の社会心理学部門の機関誌である。しかし、執筆者は当該部門のひとたちに限定しているわけではない。実際、今回の浦さんも高木さんも、いわゆる“専任者”ではない。いささかまわりくどい言いかたをしたが、要するに、ユニークな研究でありさえすれば研究者の所属などにはこだわらない、というのが本誌の暗黙の編集方針である、ということだ。

●いままで何人かのかたから、「執筆者の“輪”を外部にも広げたらどうか」とのご意見をいただいている。前述したごとくで、本誌は、実質的には「外部への公開」はいささかもやぶさかではないのである。ちなみに、“思うやよし”という仕事が出来あがったら、どうか遠慮なく、わたしどもに申し入れしていただきたいと思う。その仕事に感得し意気投合するかぎりにおいて、本誌は、通常の学術雑誌以上の“熱い”対応をしていく意思がある。

●そういうふうにして、わが国の、組織における人間の諸問題にかかわる研究者たちのあいだに、情報交換と意見交換のネットワークが活発に作動していくこと——それが本誌の、ひとつの重要な存在理由でありたい。(南 隆男)

慶應義塾大学産業研究所社会心理学班研究モノグラフ

組織行動研究 (第12号)

責任編集 佐野勝男・南 隆男

KEIO STUDIES ON
ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND
HUMAN PERFORMANCE No. 12
MARCH 1985

〒108 東京都港区三田2-15-45
発行 慶應義塾大学産業研究所
電話 03-(453)-5640(直通)
〈昭和60年3月30日〉

〒103 東京都中央区八丁堀3-21-3
印刷 株式会社 国際印刷
電話 03-(553)-2051(代表)
〈昭和60年3月23日〉